

南米、ペルーとチリの旅 [前編]

ビクーニャフェスティバル〜ナスカ

インディ柴田

今年の6月末、二週間程の日程でペルーとチリを旅行した。リマから海岸沿いを南下して、ナスカ、アレキバを経て、チリへ入った。ペルーとチリは全く違った国だった。

今回は、ナスカ周辺について。次回は南米の温泉について書く予定。ナスカがとても面白かった。その後は残務処理のような旅行になってしまった。

ビクーニャフェスティバル

6月24日、ナスカ郊外でビクーニャフェスティバルが開かれ、フジモリ大統領がやってきた。

ツアーのバスでアンデスの山の中へ約2時間半。クスコへ通じているこの道はきちんと舗装されて快適だ。このバスは私以外みんなペルー人。高校生の女の子達の団体がいて車内は大騒ぎ、元気がいい。ペルーの未来は明るい。

会場近くの道で待つことしばし。道にはツアーのバスや乗用車、トラックなど、何百台もの車がつながっている。空気が薄く、息をすると肺にすると入る。頭痛も少ししてきた。ここは標高4,000メートル近くあるのだ。ヘリコプターが飛んできた。フジモリ大統領がやってきたのだ。高校生たちは「フヒモリー！フヒモリー！」とヘリコプターに向かって大騒ぎ。車に乗り換えた



でこんなのが国の動物に指定されているのかと思ったが、野生のビクーニャはそれとは全然違ってとてもきれいだ。このお祭りでは100頭位のビクーニャが捕まえられた。

中央にフジモリ大統領がいるのがわかるだろうか。この他に大統領が車から手を振っている時の手の写真（顔は見えない）なども撮ったがピンボケだ。有名人の写真を撮るのは難しいものだ。

▼ビクーニャ。コロンビアからチリまでのアンデス山中に生息。



大統領は私達のすぐ横を手を振りながら通っていった。大統領はインカの皇帝の役をこのお祭りやるので、着ている服や帽子はインディオスタイルだった。

フェスティバルの会場近くには、昔ビクーニャ博物館があったのだが、ナスカクスコ間の治安の悪化のため、観光客がこのルートを通らなくなり、博物館も閉鎖された。近年、治安が回復し、ナスカからクスコへのバスもこのルートを通れるようになった。となると、このルート上、何か観光の目玉が欲しい。そこで目を着けたのがこの「ビクーニャ」だ。大統領がわざわざ山奥のお祭りにやってきたのは観光振興を考えてのことだ。夜のテレビニュースでこの模様が放送されたとのことだ。

大統領が定位置に着くのを待ってお祭りの開始。広い高原にいる野生のビクーニャを人垣で遠巻きして、だんだんと一箇所へ追い詰めていく。昔のインカ時代の狩猟法を再現したものだ。ビクーニャはペルーの国の動物である。ビクーニャを最初に見たのは昨年の旅行の時、クスコの郊外サクサイワマンの売店だ。檻に閉じ込められたビクーニャは汚くて、なん

フジモリ大統領が最初の一頭の毛を刈った。恐らくインカ時代には、いけにえかなんかにしていたのだろうが、このお祭りではみんな毛を刈って放される。ペルーとチリは全く違った国だった。標高4,000メートル、夜はかなり冷えるが大丈夫なのだろうか。

その後、テレビ局や新聞記者が取り巻く中、フジモリ大統領が何か話し始めたが全然こっちは聞こえない。そうこうするうち、フジモリ大統領はまたみんなの大歓声のなか、車から手を振りながら戻っていった。フジモリ大統領は依然大人気だ。でも、せっかく集まった観客に何か一言あってもよかったのではないかと少し残念だった。

帰りのバスの中も高校生の女の子は大騒ぎ。彼女らと仲良しになった分、「アキオ、歌え！」「おどれ！」と私への要求がエスカレートしてくる。まあ、そういうのも旅の楽しみのひとつだ。ペルーはみんなひとなつこいので旅行していて面白い。

ナスカ

ナスカでは地上絵を見るために飛行機にも乗ったが、よく見ないと良く分からなかった。むしろ、パンアメリカンハイウェイにあるミラドール（展望台）の方がよかった。実際の地面もどうなっているのかわかるし。フジモリ大統領の民営化政策の一環でナスカの地上絵も売りに出ていて、日本の企業が買おうとしているという話も聞いたが本当なのだろうか。ナスカ時代に作られた灌漑用水路やインカ時代の遺跡のツアーも面白い。町は大きくないけど人々は親切で私はとても気に入った。 <続く>